

成人看護学実習における実習指導の工夫 (第1報)

—ケース・サマリー発表会参加による学生と指導者への効果の検討—

中原順子・菱刈美和子・斎藤美喜*・奥山啓子**

An Attempt toward Improvement of Instruction in Adult Nursing Practice (Report I)
—The assessment of effectiveness of attendance at the meeting
for case summary reports for students and instructors—

Junko NAKAHARA, Miwako HISHIKARI, Miki SAITO*, and Keiko OKUYAMA**

It was determined to hold a meeting for case summary reports with the attendance of all the students and instructors who were enrolled in the adult nursing practice at B Hospital on the final day of practice, in addition to the conference currently performed at the ward for clinical practice, as a measure of the university for an adult nursing practice from the current fiscal year. This study aims at attaining effectiveness of attendance at the meeting for case summary reports for students and instructors and finding implications for future problems. In the present study as a first attempt to assess the effectiveness, a questionnaire survey was conducted for 44 students and 12 instructors who attended to adult nursing practice and the following meeting for case summary reports in the first semester (from May through July) with consent for this study.

Key words : 学生 students, 指導者 instructors, ケース・サマリー発表会 meeting for case summary reports, 効果の検討 assessment of effectiveness

I . はじめに

看護実践能力の育成においては、臨地実習が極めて重要な意味を持っており、さまざまな取り組みが各大学で積極的に実践されている¹⁾。臨地実習で良く行われるカンファレンスの効果は様々あるが、「実習指導そのものの効果を高めたり、集団学習として共同作業の能力や習慣を養うことが期待できる」²⁾と報告されている。そこで、本学においても、今年度より成人看護

学実習の取り組みとして、B病院においてカンファレンスの工夫を行った。その内容は、実習病棟で日々実施しているカンファレンス以外に、実習最終日にケース・サマリー発表会を取り入れ、学生・臨床指導者（以下指導者とする）、教員による共同カンファレンスを実施し、看護を深く考察する機会とした。

この学生、指導者、教員による共同カンファレンスの効果に関する先行研究を概観すると、病棟でのカンファレンスを活用しての効果

* 共立女子短期大学看護学科 (Department of Nursing, Kyoritsu Women's Junior College)

** 三井記念病院 (Mitsui Memorial Hospital)

に関する研究^{3,4)}及び、学生の実習での体験の学び⁵⁻⁸⁾を評価しているものは多数あるが、学生及び指導者の両方を対象とした研究は少ない。よって、本研究は、ケース・サマリー発表会参加による学生と指導者両方に焦点を合わせ、その効果と今後の課題の示唆を得ることを目的とした。また、実習期間は5月から11月であるが、夏休み期間中に学生は「ケース・スタディ」を書くため、今回はその要因が影響しない対象である。5月～7月にケース・サマリー発表会に参加した学生及び指導者にアンケート調査を実施した結果を報告する。

II. 研究目的

成人看護学実習でのケース・サマリー発表会参加による学生と指導者への効果と今後の課題の示唆を得ることを目的とする。

III. 研究方法

1. 研究対象

2010年5月～7月末までに成人看護学実習を行い、2回のケース・サマリー発表会に参加したA短期大学看護学科3年生44名中、研究への承諾が得られた44名(1回目19名、2回目25名)及び研究の承諾が得られたB病院の指導者12名(1回目6名、2回目6名)

2. 研究期間

2010年5月～11月

3. 調査内容

1) 学生へのアンケート調査

自己評価表(4段階評価)及び自由記述によるサマリー発表会へ参加しての感想

2) 指導者へのアンケート

所属部署及び現在の役職、サマリー発表会に関する設問13項目(4段階評価)及び自由記述によるサマリー発表会へ参加しての感想

4. 分析方法

1) 4段階評価(4点:とてもそう思う, 3点:まあまあそう思う, 2点:あまりそう思わない, 1点:全くそう思わない)による

質問項目については、項目ごとに集計し記述的統計分析を行った。統計ソフトはSPSS(Statistics 17.0)を用いた。

2) 自由記述については、学びに関する理解可能な最小単位の文脈でコード化し、類似するものをまとめ、意味内容の類似性に従ってカテゴリとした。これらのカテゴリ化にあたっては共同研究者間で合意が得られるまで検討を加えた。

IV. 倫理的配慮

研究対象である学生及び指導者には、アンケート配布時に、口頭で本研究の目的及び結果を報告することや学会発表することを説明し、同意を得た。また、研究への協力は自由意志で任意であること、無記名調査で個人が特定されないこと、協力の有無にかかわらず不利益はなく成績には一切関与しないことや、プライバシー保護のために、記載した内容は本研究以外には使用しないこと、個人名はすべて記号化しコンピューター処理すること、データの保管は、鍵のかかるところで保管することを約束した。また、本学の倫理委員会の承諾を得て実施した。

V. 結果

1. 成人看護学実習について

成人看護学実習は、表1に示すように行なわれた。

表1 成人看護学実習の概要

1. 実習目的	成人期の特徴と成人看護の役割を理解し、機能障害を持ちつつ生活している人や取り巻く人々の持つ健康問題を解決するための基礎的能力を養う。また人権擁護の大切さを知り、倫理的に対応できる能力を養う。
2. 実習期間	平成22年5月～11月中旬まで
3. 実習形態	成人看護学実習Ⅰ(急性・回復期)、成人看護学実習Ⅱ(慢性・終末期)共に4週間の実習を行う。1～2名の患者を受け持ち、看護過程を展開する。

2. ケース・サマリー発表会の内容

ケース・サマリー発表会は、表2に示すように行なわれた。

表2 ケース・サマリー発表会の内容

<p>1. 目的</p> <p>臨地実習で受け持ったケースのサマリーをまとめることで、自分が行った看護の体験を述べ、実習指導者・教員及び他学生との意見を交換することで看護を深く考察する。</p> <p>2. 目標</p> <p>1) 臨地実習で受け持ったケースのサマリーを形式（受け持ち患者紹介、看護目標・看護上の問題、看護上の問題についてのケアの経過と残された課題、体験の意味づけ・今後の課題）に沿ってまとめることができる。</p> <p>2) 実習指導者・教員・他学生との意見を交換することで、行った看護を深めることができる。</p> <p>3) サマリイの発表から、参加・発表・意見交換を行う態度・様式を学ぶことができる。</p> <p>3. 方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ケース・サマリー発表会は、実習最終日に行う。 ・ 発表時間は一人3分で簡潔に発表する。 ・ 発表はパワーポイント、ポスターセッションなど自由に行って良い。 ・ 司会進行、タイムキーパー、書記は学生が担当し、発表会の運営全てを行う。
--

3. 学生が受け持った患者の特徴

6月初旬と7月末に実施した2回のケース・サマリー発表会で紹介された患者は、1回目20名で2回目は25名だった。病棟名、年齢、性別、主な疾患について表3に示した。受け持ち患者の年齢は40歳代から90歳までと幅広く、その内訳は、40歳代3名、50歳代2名、60歳代14名、70歳代16名、80歳代5名、90歳代1名であった。性別は、男性35名、女性10名で圧倒的に男性が多かった。主な疾患は、成人看護学実習Ⅰ（急性・回復期）では胃癌、食道癌、肺癌、上行結腸癌、直腸癌、前立腺肥大、膀胱腫瘍で手術をした患者を受け持っていた。一方、成人看護学実習Ⅱ（慢性・終末期）では、脳梗塞、十二指腸潰瘍、急性肺炎、腎不全で血液透析

をしている患者、胃癌、食道癌、悪性リンパ腫、肺癌で化学療法を行っている患者を受け持っていた。

4. ケース・サマリー発表会に参加した学生の自己評価結果（表4）

1) ケース・サマリー発表会に参加しての学生の自己評価の平均値結果より

1回目は全体で3.20、2回目は3.39と僅かに2回目が高かった。

1回目の平均値で最も高かったのは、「サマリー発表会に参加して良かったと思う」3.95の項目だった。最も低かったのは、「発表するうえで工夫した」2.37、「サマリーをまとめる際に文献を活用した」2.84、「看護上の問題についてのケアの経過と残された課題は適切だった」2.84の3項目であり、その他の項目は3以上だった。

2回目の平均値で最も高かったのは、「サマリー発表会に参加して良かったと思う」4.00の項目だった。また、最も低かったのは、「発表するうえで工夫した」2.92の項目で、それ以外はすべて3以上だった。

2) 項目別にみる1回目と2回目の結果

1回目の学生の自己評価の結果は、「4点：とてもそう思う」と回答したのは総数81名で、「3点：まあまあそう思う」は110名、「2点：あまりそう思わない」35名、「1点：全くそう思わない」は2名だった。

内訳は「4点：とてもそう思う」の中で、最も多かったのは、「サマリー発表会に参加して良かったと思う」18名（95%）の項目だった。次に多かったのは「行った看護の振り返りになった」14名（74%）、「発表会の進め方は適切だった」9名（47%）の順であった。また一番少なかったのは、「発表をするうえで工夫をした」0名（0%）の項目だった。また「1：全くそう思わない」と回答したのは、「発表会の進め方は適切だった」「受け持ち患者の紹介は適切だった」各1名（2%）だった。

表3 受け持ち患者の特徴

第1回目のサマリー発表会の受け持ち患者				第2回目のサマリー発表会の受け持ち患者			
病棟	年齢	性別 1男 2女	主な疾患	病棟	年齢	性別 1男 2女	主な疾患
1	70	1	十二指腸潰瘍 肺炎 帯状疱疹	1	50	1	脳梗塞 DM
1	40	1	急性重症肺炎	1	60	1	脳梗塞
1	70	1	末期腎不全	1	60	1	脳梗塞
1	80	2	末期腎不全 うっ血性心不全	1	70	2	肝門部胆管癌 自己免疫性肝炎 閉塞性黄疸
1	60	1	左肺腺癌胸膜播種	1	70	1	慢性腎不全 頭髄損傷
1	40	1	急性肺炎	1	90	2	急性心不全 肺炎
1	70	1	急性肺炎 末期腎不全 糖尿病	1	60	1	胃癌
1	80	1	心疾患	1	70	2	悪性リンパ腫
1	80	1	十二指腸潰瘍	1	40	1	ネフローゼ症候群
1	70	1	肝性脳症	1	80	1	パーキンソン病 誤嚥性肺炎
1	60	1	胃癌	2	60	1	前立腺肥大 糖尿病 高血圧
	70	1	食道癌	2	70	1	膀胱腫瘍
1	50	1	脳梗塞 糖尿病 脂質代謝異常	2	70	1	膀胱腫瘍
2	70	1	左原発性肺癌	2	60	1	肺癌
2	70	2	胃癌	2	80	1	胃癌
2	60	2	胃癌	2	60	1	右原発性肺癌
2	90	2	胃癌	2	70	2	上行結腸癌
2	70	1	胃癌	2	70	1	バレット食道癌
2	60	1	食道癌	2	70	2	上行結腸癌
2	60	1	腹腔内膿瘍 S字結腸憩室上腸間膜解離	2	60	1	直腸癌
				2	60	1	胃癌
2	80	2	直腸癌	2	80	1	肺癌
2	80	1	肺癌	2	80	1	上行結腸癌

※病棟[1：成人看護学実習Ⅰ（急性・回復期），2：成人看護学実習Ⅱ（慢性・終末期）]

※年齢[患者の年齢は個人情報保護のために具体的に明記せず，数字は〇〇歳代と表記した。]

表4 第1回目・2回目のケース・サマリー発表会に参加しての学生の自己評価結果

設問項目	平均値		4とも思う		3まああそう思う		2あまりそう思わない		1全く思わない	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
発表会の進め方は適切だった	3.26	3.56	9名 (47%)	17名 (68%)	7名 (37%)	6名 (24%)	2名 (11%)	1名 (4%)	1名 (5%)	1名 (4%)
テーマは適切だった	3.26	3.56	5名 (26%)	14名 (56%)	14名 (74%)	11名 (44%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)
受け持ち患者の紹介は適切だった	3.37	3.24	7名 (37%)	8名 (32%)	10名 (53%)	15名 (60%)	1名 (5%)	2名 (8%)	1名 (5%)	0名 (0%)
看護目標・看護上の問題は適切だった	3.11	3.28	4名 (21%)	8名 (32%)	13名 (68%)	16名 (64%)	2名 (11%)	1名 (4%)	0名 (0%)	0名 (0%)
問題についてのケアの経過と残された課題は適切だった	2.84	3.20	4名 (21%)	7名 (28%)	8名 (42%)	16名 (64%)	7名 (37%)	2名 (8%)	0名 (0%)	0名 (0%)
体験の意味づけ・今後の課題は適切だった	3.26	3.16	7名 (37%)	10名 (40%)	8名 (42%)	10名 (40%)	4名 (21%)	4名 (16%)	0名 (0%)	1名 (4%)
サマリーをまとめる際に文献を活用した	2.84	3.40	4名 (21%)	14名 (56%)	8名 (42%)	8名 (32%)	7名 (37%)	2名 (8%)	0名 (0%)	1名 (4%)
行った看護の振り返りになった	3.74	3.92	14名 (74%)	23名 (92%)	5名 (26%)	2名 (8%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)
添付した資料は適切だった	3.26	3.32	5名 (26%)	8名 (32%)	14名 (74%)	17名 (68%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)
発表するうえで工夫をした	2.37	2.92	0名 (0%)	3名 (12%)	9名 (47%)	17名 (68%)	10名 (53%)	5名 (20%)	0名 (0%)	0名 (0%)
発表態度は適切だった	3.11	3.12	4名 (21%)	3名 (12%)	13名 (68%)	17名 (68%)	2名 (11%)	5名 (20%)	0名 (0%)	0名 (0%)
サマリー発表会に参加して良かったと思う	3.95	4.00	18名 (95%)	8名 (32%)	1名 (5%)	12名 (48%)	0名 (0%)	5名 (20%)	0名 (0%)	0名 (0%)
全体	3.20	3.39	81名	126名	110名	147名	35名	27名	2名	3名

2回目の学生の自己評価の結果では、「4点：とてもそう思う」と回答したのは総数126名で、「3点：まあまあそう思う」は147名、「2点：あまりそう思わない」は27名、「1点：全くそう思わない」は3名だった。

内訳は「4点：とてもそう思う」と最も多く回答したのは、「行った看護の振り返りになった」23名（92%）の項目で、次に多かったのは「発表会の進め方は適切だった」17名（68%）、「テーマは適切だった」14名（56%）、「サマリーをまとめる際に文献を活用した」14名（56%）の順で、1回目より2回目に50%以上を超えたものが4項目と多く認められた。また一番少なかったのは、「発表をするうえで工夫をした」3名（12%）、「発表態度は適切だった」3名（12%）の項目だった。

「1：全くそう思わない」と回答したのは、1回目と同じく「発表会の進め方は適切だった」1名（2%）の項目で、その他には「体験の意味づけ・今後の課題は適切だった」と「サマリーをまとめる際に文献を活用した」の2項目で各1名（2%）、合計3名が認められた。

3) 自己評価の設問項目に関する自由記述結果（表5）

2回のケース・サマリー発表会に参加しての自己評価の設問項目に関する自由記述を、良かった点及び課題に分類し表5に示した。

前述した1回目及び2回目を通して平均値が最も高かった「サマリー発表会に参加して良かったと思う」の項目に対して、学生は良かった点として「看護部長や他の病棟の指導者から貴重な意見が貰えた」「他の学生の学びを聞いて学びが深まった」「人前で発表することができて良かった」「情報が共有できる」という意見が認められた。課題は「少し迷うところがあった」であった。

また平均値が2番目に高かった「行った看護の振り返りになった」の項目では、良かった点を「患者に関わった場面を思い出すき

かけになった」「まとめ、自分で振り返ることが整理することができた」「今まで行ったものが正しいものであったと評価できた」等の意見があり、「意味付けをきちんとできればもっと良い振り返りになった」と課題をあげていた。3番目に高かった「テーマは適切だった」の項目では、良かった点として「発表内容に沿ったテーマだった」「この実習で一番自分の学びを深めることができたことについて取り上げた」をあげ、「テーマと内容に少しずれが生じた」「伝えたい項目が多々ありテーマの選択が難しかった」を課題としてあげていた。

1回目及び2回目を通して平均値が最も低かった「発表するうえで工夫をした」の項目に対しては、「読むだけで精一杯だった」「緊張したので」「3分以内でおさめることばかり考えてしまい個性がなくなったと思う」「パワーポイントを使う等もう少し工夫できる点があったと思う」を課題としてあげている一方で、「3分以内で読めるように練習した」「聞いている人に思いが伝わるように表現の仕方に気を付けた」「音や実際に使ったものを回覧した」等の工夫をしていた。

「発表態度は適切だった」の項目に対しては、良かった点として「聞きやすいようにゆっくり話すことができた」「前を向いて発表するように心がけた」をあげ、「早い口調で理解しづらくさせてしまった」「原稿を読み上げる形になった」を課題としてあげていた。1回目の平均値が2番目に低かった「看護上の問題についてのケアの経過と残された課題は適切だった」の項目に対しては、良かった点に「実施したこととそこから学んだことを発表できた」「実際の体験を基に記載できた」「患者の反応も良くとれた」をあげ、「自分の学びが足りなくて残ってしまった課題だから」「患者へのケアの工夫がもう少しできたのではと思う」「ケアについて実際はもっとできていたのに表現できなかった」を課題

表5 第1回目・2回目のケース・サマリー発表会に参加しての設問項目に関する自由記述

設問項目	良かった点	課題
発表会の進め方は適切だった	時間厳守で進行した	資料の印刷が遅れて他の人に迷惑をかけた
	役割分担ができておりスムーズに進行した	3分間は短く伝えたいことが伝えられなかった
テーマは適切だった	発表内容に沿ったテーマだった	テーマと内容に少しずれが生じた
	この実習で一番自分の学びを深めることについて取り上げた	伝えたい項目が多々ありテーマの選択が難しかった
受け持ち患者の紹介は適切だった	受診前から現在までの経過を簡潔にまとめられた	ケアの経過が長く省略した
	看護、治療等めまぐるしい変化を説明できた	始めてみる患者を理解するのが難しかった
	身体面・精神面・社会面の紹介ができた	どのような患者であるかを聞く人が理解できるように伝える必要があった
看護目標・看護上の問題は適切だった	何度も修正して目標・問題点をあげることができた	もっと考えられる問題があったのではないかと思う
	教員や指導者に助言を受けたが患者の問題を把握できていたと思う	自分の知識不足を感じた
	いくつか指導者の意見を取り入れて考えた	もっと早くにあげられたら良かった
問題についてのケアの経過と残された課題は適切だった	実施したこととそこから学んだことを発表できた	自分の学びが足りなくて残ってしまった課題だから
	実際の体験を基に記載できた	患者へのケアの工夫がもう少しできたのではと思う
	患者の反応も良くとれた	ケアについて実際はもっとできていたのに表現できなかった
体験の意味づけ・今後の課題は適切だった	これからの自分の課題を明確にすることができた	もっと文献を活用して意味付けを深める必要があった
	患者を通して自分の看護を振り返ることができた	今後の課題が明確でなかった
	参考文献をうまく活用できた	発表したいことをうまく表現できなかった
	実施したケアについて学びを深められた	あまり納得のいくものにならなかった
サマリーをまとめる際に文献を活用した	活用しないとその人の現在の治療や病気を理解できない	求めている文献を探し出すことができなかった
	文献を参考にして自分の行った看護を振り返ることができた	事例に対してどのような文献を使ったら良いのか自分で分からなかった
行った看護の振り返りになった	患者に関わった場面を思い出すきっかけとなった	意味付けがきちんとできればもっと良い振り返りになった
	まとめ、自分で振り返ることで整理することができた	
	今まで行ったものが正しいものであったと評価できた	
添付した資料は適切だった	パンフレットを活用し、個性性を見てもらえるようにした	もっと分かりやすく表現する方法を学習する必要がある
	自分の発表に即した資料だった	パンフレットを配布したが目を通して貰える時間がもっと欲しかった
発表するうえで工夫をした	3分以内で読めるように練習した	読むだけで精一杯だった
	聞いている人に思いが伝わるように表現の仕方に気を付けた	緊張したので
	資料を添えることで聞いている人に分かりやすく伝えるようにした	3分以内でおさめることばかり考えてしまい、個性がなかったと思う
	音を使ったり、実際に使ったものを閲覧した	パワーポイントを使う等もう少し工夫できる点があったと思う
発表態度は適切だった	聞きやすいようにゆっくり話すことができた	早い口調で理解しづらくさせてしまった
	前を向いて発表するように心がけた	原稿を読みあげる形になった
サマリー発表会に参加して良かったと思う	看護部長や他の病棟の指導者から貴重な意見を貰えた	少し迷うところがあった
	他の学生の学びを聞いて学びが深まった	
	人前で発表することができて良かった	
	情報が共有できる	

と感じていた。

同じく1回目の平均値が2番目に低かった「サマリーをまとめる際に文献を活用した」の項目では、良かった点として「活用しない

とその人の現在の治療や病気を理解できない」「文献を参考にして自分の行った看護を振り返ることができた」をあげ、「求めている文献を探し出すことができなかった」「事

成人看護学実習における実習指導の工夫（第1報）

例に対してどのような文献を使ったら良いのか自分で分からなかった」を課題としていた。また、1回目及び2回目を通して「1点：全くそう思わない」と回答した「発表会の進め方は適切だった」の項目では、良かった点として「時間厳守で進行した」「役割分担ができておりスムーズに進行した」をあげ、「資料の印刷が遅れて他の人に迷惑をかけた」「3分間は短く伝えたいことが伝えられなかった」等を課題としていた。

5. ケース・サマリー発表会に参加しての学生の感想（自由記述 表6・表7）

1回目のケース・サマリー発表会に参加しての学生の自由記述から、学びに関する25のコードを抽出し、意味内容の類似性に従って5つのカテゴリーとしてまとめた（表6）。また、2回目のケース・サマリー発表会に参加しての学生の自由記述からは、学びに関する48のコード

を抽出し、5つのカテゴリーとしてまとめた（表7）。（以下《カテゴリー》として示す。）

《他者の学び・指導から自己の学びを深め、視野を広げることができた》《自分の行った看護の振り返りができた》では、学生の発表や教員、指導者のアドバイスから多くの学びを得ていた。また、学生自身がサマリーをまとめることに懸命に取り組むことや、他の学生が悩んだこと・工夫したことを聞くことで、看護の振り返りができ視野が広がったと感じていた。《思考と気持ちの整理ができた》では、サマリーをまとめることで、自分の気持ちや考えを整理することができたと感じていた。《看護の取り組みへの気持ちに変化した》では、看護の奥深さを感じ、サマリー発表会での貴重な経験を今後につなげていこうという感想が認められた。

《準備や決められた時間内でまとめ・伝えることの大変さ》では、発表の準備に時間をとら

表6 第1回目ケース・サマリー発表会に参加しての学生の感想

急性・回復期実習 コード	数	カテゴリー	慢性・終末期実習 コード	数
みんなの学びを知ることができた	2	他者の学び・指導から自己の学びを深め、視野を広げることができた	他の学生が何を学んだのかわかることで自分の学びを深められた	1
たくさんの感じ方を見れた	2		みんながどれだけ頑張ったのか、どんな工夫があったのかわかることができ、自分の甘さが知れてよかった	1
色々な視点から看護を見れた	2		自分の看護の学び、みんなの看護について学びを聞くことで、共有し、深まった	3
臨床の指導者にコメントをもらえて学びが深まりうれしかった	1		一人ひとりの看護が聞けてこの4週間で受持ち患者さんや看護師さんたちから多くのものを学んだ	1
			さまざまな疾患や患者さん、看護と工夫が聞けて視野が広がった	1
			看護師さんたちから多くのものを学ばせていただいたと再度実感した	1
患者への看護を振り返り自分が行った援助を振り返られた	1	自分の行った看護の振り返りができた	他の人が悩んだこと工夫したことなどが聞け、改めて自分の振り返りが出来た	1
はじめは緊張したが終わった後の達成感があった	1	緊張したり大変だったが達成感があった	大変だったけど少し緊張したけれど、達成感がものすごくある	1
大変だった 3分間で言いたいことをまとめ伝えるのは難しい	2	準備や決められた時間内でまとめ・伝えることの大変さ	発表の準備をするのが時間がなく大変であり、受け持ちの日々記録が同時に行えなくなった	1
臨床の看護師に自分の考えを聴いてもらうことで意識が高まった	1	看護の取り組みへの気持ちに変化した	看護は一言では語れないものだ改めて思った	1
このサマリーの経験を今後につなげたい	1			
小計	13		小計	12
		合計 25		

表7 第2回目ケース・サマリー発表会に参加しての学生の感想

急性・回復期実習 コード	数	カテゴリー	慢性・終末期実習 コード	数	
発表会で他の学生の学びを聞くことは自分の勉強になった	1	他者の学び・指導から自己の学びを深め、視野を広げることができた	みんなの看護を聞いて参考になったし学びを深めることが出来た	4	
他の人の発表を聞くことで、自分の中でいろいろな状況における看護を感じ取ることができた	1		他の学生が何を学んだのかわかることで自分の学びを深められた	1	
他の人の学びを聞いて良かった	2		仲間の発表を聞いていて、一人ひとり皆、努力し頑張ってきたこと、思いが伝わってきた	1	
他の学生の学びを聞くのは楽しく自分自身も学習になる	1		みんなの看護について学びを聞くことで共有し、自分の看護の学びが深まった	4	
他の学生の援助方法や考えを聴いてみていろいろな考え方や援助の方向性や向かう姿勢があることがわかり学びを深めることができた	2		一人ひとりの看護が聞いて受持ち患者さんや看護師さんたちから多くを学んだ	1	
サマリーをまとめるのは大変であるが、これを行うことで学びを深めることができた	1		さまざまな疾患や患者さん、看護と工夫が聞けて視野が広がった	1	
看護師や先生、同じ学生からさまざまな視点での意見も聞くことができ、他の人の発表を聞くことで、自分の中でいろいろな状況における看護を感じ取ることができた	1				
他の学生は患者に向き合い、看護を実践しているということが分かったのでとてもすごいと思った	1		自分の行った看護の振り返りができた	他の人が悩んだこと工夫したことなどが聞け、改めて自分の振り返りが出来た	1
準備は大変だったが自分の振り返りになった	1			みんながどれだけ頑張ったのか、どんな工夫があったのかわかることができた	1
行った看護から学んだことを自分の言葉で発表することで自分自身の振り返りにもなった	1			サマリーをまとめることによって、自分の実習での看護を振り返ることができた	2
		自分の実習での看護を振り返ることが出来た。振り返ることによって、適切な看護が行えていたのか、また自分の足りない部分を確認することができた		1	
		懸命に取り組む事で今まで自分の行ってきた看護について振り返り、考えをまとめることができた		1	
自分の考えを話すことは苦手だったので不安だったが、サマリーをまとめるながら少しずつ整理することができました	1	思考と気持ちを整理することができた	自分の行った看護、患者さんの反応をまとめることで頭の中を整理することができた	1	
実習時の自分の気持ちを整理することができた	1		自分の気持ちを整理することができた	1	
発表は緊張してしまい練習通りにはいかなかった	1	緊張したり大変だったが達成感があった	大変だったけど少し緊張したけれど、達成感がものすごくある	1	
はじめは緊張したが終わった後の達成感があった	1		達成感を得ることができた	1	
			サマリー発表会は緊張しましたが、社会人になったとき発表する機会があると思うので今後のためになった	1	
慢性期実習も真剣に取り組んでいこうと思った	1	看護の取り組みへの気持ちが変化した 実感した	看護師に自分の考えを聞いてもらうことで、意識も高まり、よりよい援助を今後行っていきたいと思えるようになった	1	
今後の実習に活用したい	2		今後も皆と友に前に進んでいきたいと感じた	1	
患者さんに看護学生を受け持てて良かったと思って貰えるよう看護を行いたいと改めて強く実感した	1		今後の実習の参考にしたい	1	
			いろいろな人の学びを参考に自分を高めていく活力になった	1	
			友達との素敵な発表を聞いて私ももっと頑張ろうと思った	1	
小計	20			小計	28
			合計48		

成人看護学実習における実習指導の工夫（第1報）

れ、実習中の他の記録を書くことが難しくなったこと、3分間という時間制限がある中で、自分が伝えたいことをまとめて発表することの難しさや大変さを感じていた。《緊張したり大変だったが達成感があった》というように、緊張したが、参加したことでの達成感や充実感を感じていることが示された。

6. ケース・サマリー発表会に参加しての指導者のアンケート調査結果（表8）

1回目のケース・サマリー発表会に参加した指導者は、主任1名、副主任2名、スタッフ2名、無記名1名の合計6名だった。アンケート調査結果で「4点：とてもそう思う」が一番多かったのは、「サマリー発表会に参加して良かったと思う」「学生指導への興味関心が持てた」の2項目で、全員が回答していた。「4点：とてもそう思う」が次に多かったのは、「学生指導の振り返りになった」5名（83%）で、「4点：とてもそう思う」が50%以上だったのは、「学生への理解が変化した」「発表態度は適切だった」「体験の意味付け・今後の課題は適切だった」「受け持ち患者の紹介は適切だった」「看護目標・看護上の問題は適切だった」の5項目ですべて3名（50%）の回答だった。

「4点：とてもそう思う」が一番少なかったのは、「学生の発表会の進め方は適切だった」1名（17%）、

「看護上の問題についてのケアの経過と残された課題は適切だった」1名（17%）の項目だった。設問項目全体の中で「2点：あまりそう思わない」と回答があったのは、「看護目標・看護上の問題は適切だった」1名（17%）だけだった。

2回目のケース・サマリー発表会に参加した指導者は、主任1名、副主任1名、スタッフ3名、無記名1名の合計6名だった。アンケート調査結果で「4点：とてもそう思う」が一番多かったのは、「学生への理解が変化した」「学生指導への興味関心が持てた」「学生の発表会の進め方は適切だった」の3項目ですべて4名（67%）だった。「4点：とてもそう思う」が一番少なかったのは、「学生指導の振り返りになった」「体験の意味付け・今後の課題は適切だった」「看護上の問題についてのケアの経過と残された課題は適切だった」「看護目標・看護上の問題は適切だった」「受け持ち患者の紹介は適切だった」の5項目で、すべて2名（33%）だった。設問項目全体の中で「2点：あまりそう思わない」と回答があったのは、「発表態度は適切だった」「受け持ち患者の紹介は適切だった」の2項目で、すべて1名（17%）だった。

ケース・サマリー発表会に参加しての指導者のアンケート調査の平均値は、1回目が3.53に

表8 ケース・サマリー発表会に参加しての指導者のアンケート調査結果

設問項目	平均値		4とてもそう思う		3まあまあそう思う		2あまりそう思わない		1全くそう思わない	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
学生が提示したテーマに関心がもてた	3.33	3.50	2名(33%)	3名(50%)	4名(67%)	3名(50%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)
学生の発表会の進め方は適切だった	3.17	3.67	1名(17%)	4名(67%)	5名(83%)	2名(33%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)
受け持ち患者の紹介は適切だった	3.50	3.12	3名(50%)	2名(33%)	3名(50%)	3名(50%)	0名(0%)	1名(17%)	0名(0%)	0名(0%)
看護目標・看護上の問題は適切だった	3.33	3.33	3名(50%)	2名(33%)	2名(33%)	4名(67%)	1名(17%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)
問題についてのケアの経過と残された課題は適切だった	3.17	3.33	1名(17%)	2名(33%)	5名(83%)	4名(67%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)
体験の意味付け・今後の課題は適切だった	3.50	3.50	3名(50%)	2名(33%)	3名(50%)	4名(67%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)
発表態度は適切だった	3.50	3.33	3名(50%)	3名(50%)	3名(50%)	2名(33%)	0名(0%)	1名(17%)	0名(0%)	0名(0%)
学生指導への興味・関心が持てた	4.00	3.67	6名(100%)	4名(67%)	0名(0%)	2名(33%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)
学生指導の振り返りになった	3.83	3.33	5名(83%)	2名(33%)	1名(17%)	4名(67%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)
学生への理解が変化した	3.50	3.67	3名(50%)	4名(67%)	3名(50%)	2名(33%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)
サマリー発表会に参加して良かったと思う	4.00	3.50	6名(100%)	3名(50%)	0名(0%)	3名(50%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)
全体	3.53	3.45	36名	31名	29名	33名	1名	2名	0名	0名

対し、2回目は3.45とやや低かった。1回目に比べて2回目が低かったのは、「サマリー発表会に参加して良かったと思う」4.00から3.50に、「学生指導への興味・関心が持てた」4.00から3.67に、「学生指導への振り返りになった」3.83から3.33に、「発表態度は適切だった」3.50から3.33に、「受け持ち患者の紹介は適切だった」3.50から3.12の5項目だった。逆に2回目が1回目より高くなったのは、「学生への理解が変化した」3.50から3.67に、「看護上の問題についてのケアの経過と残された課題は適切だった」3.17から3.33に、「学生の発表会の進め方は適切だった」3.17から3.67に、「学

生が提示したテーマに関心が持てた」3.33から3.50の4項目だった。

7. ケース・サマリー発表会に参加しての指導者の感想 (自由記述 表9)

2回のケース・サマリー発表会に参加しての指導者の自由記述から、学びに関する27のコードを抽出し、意味内容の類似性に従って3つのカテゴリーとしてまとめた。(以下《カテゴリー》として示す。)《学生への理解が深まり勉強になった》では、実習指導中や記録物からは分からなかった学生の思いや考えていたことが、サマリーの発表を聞くことで理解でき、勉強になったと感じていた。《学生指導への興味

表9 ケース・サマリー発表会に参加しての指導者の感想

第1回目 コード	数	カテゴリー	第2回目 コード	数	
実習指導中には分からなかった学生が考えていたことが今回の発表で知ることができた	1	学生への理解が深まり勉強になった	学生が色々な思いを持って実習していたのだと分かることができた	1	
どういう気持ちで患者へ関わっているかが分かった	1		良く患者の大切な変化を受け止めているなど思った	1	
普段の記録物では分からなかったが、学生の頭の中がすごく良く分かった気がする	1		学生の感性に気持ちを新たにすることができた	1	
学生が実習を通して様々なことを感じ、学んでいることがとてもよく分かった	1		学生が学生なりの力と気持ちがいっぱい詰まったものであると思った。忘れないでいたいと思う	1	
患者の大切な一瞬をつかんでくれていた場面が多くてうれしかった	1		とても勉強になった	1	
実習中は分かりずらかったので、体験の意味付けを聞いて良かった	1				
他病棟の内容も知ることができて参考になった	2				
学生指導の良い振り返りになった	1				
学生が持っている力をもっと引き出していけるよう今後の指導を工夫したいと思う	1		学生指導への興味が持て、指導の振り返りになった		
実習指導の楽しさを改めて感じるすることができた	1				
4週間を通して学生指導に興味が持てた	1				
学生が提示したテーマは慢性期・急性期の特徴をとらえていた	1	サマリー発表会についての思いや要望	発表時間が短く進むペースが速いので、発表時間中に全てを読み込めないで、事前に資料を配布して貰いたい	1	
声がいまいち聞きづらかった	1		発表会に時間がとられ、実習時間が減ってしまうのは唯一残念である	1	
受け持ち患者の紹介は関わっていない患者でも患者の状況が見えてきた	1		発表会の進め方は1回目に比べてスムーズだった	1	
多くの看護師に発表内容を聞かせたかった	1		1回目に比べてかなりレベルアップしているように思う	1	
一人の発表が3分で、資料が当日配布ではゆっくり読み込むことができないので勿体無いと思う	1				
発表会の時間配分に無理があると思う	1				
小計	18			小計	9
			合計27		

が持て、指導の振り返りになった》では、1回目の自由記述からのみ抽出されたが、実習指導の楽しさや、学生が持っている力を引き出していけるよう指導を工夫する必要性を感じていた。《サマリー発表会についての思いや要望》では、1回目よりは2回目と回を重ねることで、発表会の進め方がスムーズになり、内容もレベルアップしていることを評価している一方で、サマリー発表会に時間がとられ、実際の実習時間が短縮されることへの懸念や、一人3分という短い発表時間内に内容を十分検討することができないことから資料の事前配布を希望する指摘があった。

Ⅵ. 考 察

ケース・サマリー発表会は、先述した（表2）の3つの目標を達成するために実施したが、その目標がどのように達成されたかに沿って考察することで、ケース・サマリー発表会参加による学生と指導者への効果と今後の課題を検討する。

1. 目標1)の達成状況

目標1)については、「受け持ち患者の紹介は適切だった」「看護目標・看護上の問題は適切だった」「看護上の問題についてのケアの経過と残された課題は適切だった」「体験の意味づけ・今後の課題は適切だった」の4つの設問項目に対する学生の自己評価及び指導者のアンケート調査の結果から考察する。

4つの項目の中で、1回目の学生の自己評価の平均値が3以下で、自己評価の「4点：とてもそう思う」が一番少なかったのは「看護上の問題についてのケアの経過と残された課題は適切だった」の項目だった。指導者のアンケート結果でも「4点：とてもそう思う」と回答したのは、1回目が1名（17%）、2回目が2名（33%）という結果だった。この設問項目に対しての学生の自由記述では、良かった点に「実施したこととそこから学んだことを発表できた」「実際の体験をもとに記載できた」「患者

の反応も良くとれた」をあげてはいたが、「自分の学びが足りなくて残ってしまった課題だから」「患者へのケアの工夫がもう少しできたのではと思う」「ケアについて実際はもっとできていたのに表現できなかった」を課題と感じていた。

この項目は、4週間の実習で学生が患者に実際に行なった看護を紹介する内容であり、学生の学びが少なく課題を残してしまうようなことがないように日々の指導を見直すと共に、行った看護の体験をきちんと表現できるように指導を行う必要性が示唆された。

「看護目標・看護上の問題は適切だった」の設問項目に対しての学生の自由記述からは、「何度も修正して目標・問題点をあげることができた」「教員や指導者に助言を受けたが患者の問題を把握できていたと思う」「もっと早くにあげられたら良かった」「自分の知識不足を感じた」等、教員や指導者の指導があれば適切な問題や目標をあげられるが、学生個人では時間がかかり困難な状況が理解できた。

「体験の意味づけ・今後の課題は適切だった」の設問項目に対しての学生の自由記述からは、「実施したケアについて学びを深められた」「これからの自分の課題を明確にすることができた」「もっと文献を活用して意味付けを深める必要があった」があげられた。臨地実習では、「学生が体験したことをいかに看護の経験とし、そこからどのような看護を学んでいくかが重要となる」⁹⁾と言われる。学生が「実施したケアについて学びを深められた」と感じているように、サマリーをまとめ発表することにより、学生が体験したことを意味づけし、今後の課題を考えることは学生の成長を促す効果があると考える。

以上4つの項目のうち「看護上の問題についてのケアの経過と残された課題は適切だった」の項目だけが、1回目の学生の自己評価の平均値が3以下だったが、2回目及び他の3つの項目は2回とも自己評価の平均値は3以上だった

ことから概ね1の目標は達成されたと考える。

目標1)を達成するために、文献を活用したかを問う「サマリーをまとめる際に文献を活用した」の設問項目は、1回目の平均値が2.84に対し2回目が3.40だった。これは「体験の意味づけ・今後の課題」をまとめる際に、文献を使用して自分の行った看護を振り返り、理論と実践との統合を図る「体験の意味づけ」の根拠を明確するという学生の意識の薄さや、2回目の学生では前期の中でも様々な実習を経た中で学生の学習成果として結果に違いが出たものと推察する。このことは、教員が学生に再指導を行い改善できるように調整を行った。また、この項目に対し学生は、良かった点として「活用しないとその人の現在の治療や病気を理解できない」「文献を参考にして自分の行った看護を振り返ることができた」をあげ、「求めている文献を探し出すことができなかった」「事例に対してどのような文献を使ったら良いのか自分で分からなかった」を課題としていたことから、指導が必要とされる内容が把握できたと考える。

2. 目標2)の達成状況

2回のケース・サマリー発表会に参加しての学生の自由記述から共通に抽出されたカテゴリーは、《他者の学び・指導から自己の学びを深め、視野を広げることができた》《自分の行った看護の振り返りができた》《緊張したりして大変だったが達成感があった》《看護の取り組みへの気持ちが変化した》の4つだった。

《他者の学び・指導から自己の学びを深め、視野を広げることができた》《自分の行った看護の振り返りができた》では、学生の発表や教員、指導者の助言から多くの学びを得ていた。また、学生自身がサマリーをまとめることに懸命に取り組むことや、他の学生が悩んだこと・工夫したことを聞くことで、看護の振り返りができ視野が広がったと感じていた。多くの報告^{10)~13)}にもあるように、一人の学生の体験が他の学生にも共有され、一人の患者だけから

は学ぶことができない様々な看護を学ぶことができると共に、受け持ち以外の患者についても討論することによって、他者の意見を聞き、看護について考えを深めたり広げたりする機会となっていたことが理解できた。そして、このような体験は、結果として今後の実習に真剣に取り組むことや、よりよい援助ができるように自分を高めていくことへの活力に繋がり、《看護の取り組みへの気持ちが変化した》という結果になったと考える。さらに、これらの学びが得られたことが影響して、「サマリー発表会に参加して良かったと思う」と「行った看護の振り返りになった」の2項目が、2回実施したケース・サマリー発表会に参加しての学生の自己評価の平均値が最も高い結果になったと考える。

学生はサマリーをまとめることで、自分の気持ちや考えを整理することで《思考と気持ちの整理ができた》と感じていた。黒田が述べるように「臨地実習は患者を目の当たりにしながら、悩み苦しみがらどのように接していけば良いのか、どのようなケアを行っていけばよいのかを考える場である。」¹⁴⁾と理解する。学生は、受け持ち患者との関わりの中で感じたことや学びを、サマリーをまとめることで振り返り客観的に言語化することで、得たことの意味をさらに深めることができたことが理解できた。

指導者の感想の自由記述から、《学生への理解が深まり勉強になった》のカテゴリーが抽出された。指導者は、実習指導中や記録物からは分からなかった学生の思いや考えていたことが、サマリーの発表を聞くことで理解でき、勉強になったと感じていた。また、《学生指導への興味を持って、指導の振り返りになった》は、第1回目の自由記述のみから抽出されたが、実習指導の楽しさや、学生が持っている力を引き出していけるような指導を工夫する必要性を感じていた。以上のことから、ケース・サマリー発表会は指導者自身を振り返る機会となり、自己啓発として有効だったのではないかと推察する。

3. 目標3)の達成状況

学生の感想の自由記述から《緊張したり大変だったが達成感があった》というカテゴリーが抽出された。このことから学生は、自分がうまく発表できるかということへの不安や緊張感を持ちながら何度も発表への練習を行い、ケース・サマリー発表会に臨んでいることが理解できた。そのような状況の中、「臨床の指導者にコメントをもらえて学びが深まりうれしかった」とあるように、指導者からの肯定的なフィードバックや励ましの言葉を受けるとという経験から、他者の前で発言する勇氣や自信に繋がって達成感を感じることができたと考えられる。

《準備や決められた時間内でまとめ・伝えることの大変さ》では、3分間という時間制限がある中で、自分が伝えたいことをまとめて発表することの難しさや大変さを感じていたことが理解できた。「発表の準備に時間をとられ、実習中の他の記録を書くことが難しくなった」という学生の感想や、指導者の「発表会に時間をとられ実習時間が減ってしまうのは唯一残念である」という意見があったが、実習の最終日1日をケース・サマリー発表会に費やす効果を評価するとともに、学生が行った看護の体験を指導者・教員及び他学生との意見を交換することで、看護を深く考察するためのケース・サマリー発表会以外での方法を、実習施設と再検討することは今後の課題としたい。

1回目及び2回目のケース・サマリー発表会を通して「4点：とてもそう思う」が一番少なかったのは、「発表をするうえで工夫をした」の項目で、平均値は1回目が2.37に対し2回目の平均値が2.92と3以下という結果だった。この項目に対する良かった点として学生が感じていたことは、「3分以内で読めるように練習した」「聞いている人に思いが伝わるように表現の仕方に気を付けた」「音や実際に使ったものを回覧した」等で、「読むだけで精一杯だった」「緊張したので」「3分以内でおさめることばかり考えてしまい、個性がなくなったと思う」「パワーポイントを使う等もう少し工夫できる

点があったと思う」等を課題として感じていた。学生は、最終週まで実習を行いながらサマリートをまとめ、3分という短い発表時間内に発表を効果的に行うために、発表原稿を準備し何度も練習して緊張しながら発表に臨んでいる状況が理解できた。

「発表態度は適切だった」の項目に対しては、良かった点として「聞きやすいようにゆっくり話すことができた」「前を向いて発表するように心がけた」をあげ、「早い口調で理解しづらくさせてしまった」「原稿を読み上げる形になった」を課題と感じていた。指導者のアンケート結果では「学生の発表会の進め方は適切だった」は、1回目の平均値3.17から2回目の平均値3.67まで上がったが、これは、1回目のケース・サマリー発表会当日の印刷物が間に合わず、開始時間を10分程度遅れてしまったことが影響していると考えられる。指導者の感想の中で、1回目よりは2回目と回を重ねることで、発表会の進め方がスムーズになり内容もレベルアップしていることを評価する意見があった。これは、ケース・サマリー発表会は今年度初めての試みであり、1回目は全てが慣れない中で行われたのに対し、2回目の学生はサマリー発表会に関する情報を1回目終了した学生より得ていたことや、教員も準備や指導の見通しがつくようになったことも影響していると考えられる。

Ⅶ. 結論と課題

ケース・サマリー発表会参加による学生と指導者への効果と今後の課題を検討することで、以下のことが示唆された。

1. 「サマリー発表会に参加して良かったと思う」と「行った看護の振り返りになった」の2項目が、2回行なわれたケース・サマリー発表会に参加しての学生の自己評価の平均値が最も高い結果になっていた。
2. サマリー発表会に参加することで、一人の学生の体験が他の学生にも共有され、一人の患者だけからは学ぶことができない様々な看

護を学ぶことができると共に、受け持ち以外の患者についても討論することによって、他者の意見を聞き、看護について考えを深めたり広げたりする機会となっていた。そしてこのような体験は、結果として今後の実習に真剣に取り組むことや、よりよい援助ができるように自分を高めていくことへの活力に繋がっていた。

3. 学生は自分がうまく発表できるかということへの不安や緊張感を持ちながら、何度も発表への練習を行いケース・サマリー発表会に臨んでいる状況の中、指導者からの肯定的なフィードバックや励ましの言葉を受けるという経験から、他者の前で発言する勇気や自信に繋がり達成感を感じることができていた。
4. 学生は、受け持ち患者との関わりの中で感じたことや学びを、サマリーをまとめることで振り返り客観的に言語化することで、得たことの意味をさらに深めることができていた。
5. 指導者は、実習指導中や記録物からは分からなかった学生の思いや考えていたことが、サマリーの発表を聞くことで理解でき勉強になったと感じていた。また、実習指導の楽しさや、学生が持っている力を引き出していけるような指導の工夫をする必要性を感じていたことから、ケース・サマリー発表会は、指導者自身を振り返る機会となり自己啓発として有効だった。
6. サマリーを形式に沿ってまとめるにあたり、特に「看護上の問題についてのケアの経過と残された課題」については、学生及び指導者の評価が低く（「4点：とてもそう思う」が少ない）、日々の指導を見直すとともに、行った看護の体験をきちんと表現できるように指導を行う必要がある。

指導者よりサマリー発表会に時間がとられ、実際の実習時間が短縮されることへの懸念や、一人3分という短い発表時間内に内容を十分検討することができないことから、資料の事前配

布を希望する指摘があった。資料の事前の配布は工夫次第ですぐにでも解決する内容であるが、実習の最終日1日をケース・サマリー発表会に費やす効果を評価するとともに、学生が行った看護の体験を指導者・教員及び他学生との意見を交換することで、看護を深く考察するためのケース・サマリー発表会以外での方法を、実習施設と再検討することは今後の課題である。

VIII. おわりに

本研究は、成人看護学実習を前期に行った2回のケース・サマリー発表会に参加しての学生の自己評価及び指導者のアンケート調査をまとめたものであり、完結したものではない。今後も後期に行なった結果と共に検討を重ね、ケース・サマリー発表会参加による学生と指導者への効果と今後の課題を明らかにしていく。

引用・参考文献

- 1) 石井邦子：看護学教育の在り方に関する検討会（第二次）を終えて、看護教育45(6), P. 435-439, 2004.
- 2) 瀬川陸子：臨地実習における看護計画をテーマとするカンファレンスの指導, 川崎医療福祉学会誌11(1), P. 43-48, 2001.
- 3) 今泉郷子, 谷山牧他：回復過程援助実習でモジュールカンファレンスに参加したことの効果, 川崎市立看護短期大学研究紀要, P. 51-59, 2005.
- 4) 島田三鈴：成人急性期看護実習におけるカンファレンステーマ提示の有無による学びの検討, 川崎医療福祉学会誌17(1), P. 97-105, 2007.
- 5) 荒木玲子：実践的教育としての臨地実習における学生の成長要因(2)―臨地実習における学生の経験からの学び―, 足利短期大学研究紀要20(1), P. 45-54, 2000.
- 6) 瀬川陸子, 原頼子：終末期看護実習における死生観構築と共感性育成の効果的指導, 川崎医療福祉学会誌15(1), P. 141-

- 147, 2005.
- 7) 松本幸子, 内海文子他: 成人看護実習に「臨死期のケア」討議を取り入れた学習方法からの学生の学び—実習記録内容の分析から—, 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要6, P.35-42, 2006.
- 8) 片穂野邦子, 松本幸子他: 成人看護実習における集中治療部見学実習での学生の学び—実習記録内容の分析を通して—, 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要6, P.43-48, 2006.
- 9) 荒木玲子: 実践的教育としての臨地実習における学生の成長要因(2)—臨地実習における学生の経験からの学び—, 足利短期大学研究紀要20(1), P.51, 2000.
- 10) 瀬川睦子: 臨地実習における看護計画をテーマとするカンファレンスの指導, 川崎医療福祉学会誌11(1), P.43-48, 2001.
- 11) 黒田裕子: 看護過程の教え方, 医学書院, P.115-117, 2000.
- 12) 松本幸子, 内海文子他: 成人看護実習に「臨死期のケア」討議を取り入れた学習方法からの学生の学び—実習記録内容の分析から—, 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要6, P.39, 2006.
- 13) 川島みどり, 杉野元子: 看護カンファレンス, 医学書院, P.148, 2008.
- 14) 前掲書 P.84
- 15) 吉川彰二, 細田康子他: 臨地実習終了時の看護実践力におけるeラーニング導入の効果, 大阪府立大学看護学部紀要14(1), P.45-50, 2008.